

世界一高いデパート「ハロッズ」へ

上村 文香

ロンドン滞在記。孫はロンドンナーク④



チューブとよばれる世界最古の地下鉄の「ボンストリート駅」にて

自分では行き方を調べたりしないと娘に叱られながら、22日は、ピクトリア&アルバート博物館へ。絵画、彫刻、家具、装飾品が収蔵されておあり、中庭も素敵であった。この中庭には、噴水があり子ども達が暑い時に水遊びによく来ているそうである。併設のカフェでランチをし、私一人でハロッズに買い物を。ハロッズは、世界一高いデパートと言われているので、見るだけーと思っていたが、地下の売り場で紅茶などを買う。滞在中、

娘たちが通訳をしてくれ、私は、Thank you, yes, no, sorryしか言っていなかったが、ハロッズでは、麻のバッグを探していることを拙い英語で伝えると買うことができた。帰りに地下鉄の行先を間違えて途中から別の方面に向かっていることに気が付き、ホームで誰かに確認したかったが、携帯で話をしていない人ばかりで話しかけられない。娘が間違えないように写真を撮ってくれていたので確認すると終点まで乗ってセントラル線に乗って二つ目の駅がいつもの駅ということが分かり、無事帰ることができた。この日から、娘のパートナーはドイツに4日間の出張で、孫の世話をよりすることができ、

多くなくなったが、カード遊びや粘

土遊びをして触れあうことができて嬉しく過ごした。23日は、バスに乗って下の孫と3人でキューガーデンに行き、道中のバスの中で孫は向かいに座っているおじさんに「ハロー」と声をかけ、返してもらった。ナーサリーに通うようになって積極性が出てきたとのこと。キューガーデンは、さすがに王立だけあって広くて手入れが行き届いており、温室には、世界中から集められた植物が植えられ、薔薇の花壇も花盛りで綺麗だった。売店で買い物をする、ハンサムな店員さんに「サンキュー」と返されたが、英語が話せればもっと気の利いた返事ができたのと思った。毎日気温が18度位なので、私は寒くて着込んでいたが、現地の人には平気でタンクトップやへそ出しの人がいる

一方、ダウンを着ている人もいた。連日出掛けていたので疲れが出て、喉が痛くなり咳も出てきたので一日休養する。イギリスは緯度が高く夜8時半ころ日が落ち始め夕焼けが長く、完全に日が暮れるのは9時過ぎからである。この時間に、台所で洗い物をしていると、お向かいのお爺さんが決まって夕食を作っていた。お婆さんはいるけど食事の支度はお爺

さんがしているそう。ジエンダーフリーの走りかな？また、イギリスの人はガーデニングが大好きで、どこの家でも薔薇や季節の花々が植えられていて、散歩していても花に癒されたり。娘達の家の庭は広くて綺麗に手入れがされているので聞くと、ガーデナーが手入れに来てくれるそうである。ヨーロッパでは道路に縦列駐車をしているのが当たり前だが、車庫

証明が無く割り当てられた駐車場所にお金を払っているようだ。体調も良くなり、25日は、映画で有名になったノッティンゲルは、地下鉄から外へ出るとそこは高級住宅街。パステルカラーの住宅や大邸宅が立ち並んでいくとアンティーク市で有名なペローマーケットがあり賑わっていた。

高退協読書会案内

12月例会は「絶望の裁判所」(瀬木比呂志)を課題本に高橋泰宏、樋口勇雄、井上圭介、大川法由記の4名で行われました。第196回(2月例会)は以下のように行われます。参加希望者は直接お越しください。

第196回(2月例会)2月15日(木)14:00
ムト一荘2F(205号室)
参加費 600円(会場使用料)

【テキスト】「なぜ必敗の戦争を始めたのか 陸軍エリート将校反省会議」(文春新書) 880円+税

(感想・レビュー)

○1976年に掲載された陸軍幹部の座談会をまとめたもの。編・解説が半藤一利氏で2019年発行。海軍強硬派の存在に光が当てられている。

○南方侵攻を進める海軍。北への侵攻を進める陸軍。お互いの組織の本質を見極めることなく、お互いをカバーすることなく戦争に突き進む。外交面ではアメリカは戦争に参加することはないだろうという考えと、ドイツがソ連を倒してくれるという楽観論と他力本願。そして戦争が泥沼化しても誰も責任を取ろうとしない無責任体質。戦争は始めるのは容易かもしれないけど、どのように終わらせるかも考えてもらいたい。戦争をしないためには、戦争を知ることが大切という意見には納得してしまいました。

○読んでいて気が重くなった海軍との確執



果たして陸軍だけが悪かったのか? 幻の座談会を再現! 昭和史は書き忘れた二巻目。語り継がれるものであります。